

母親は薪を煖炉に落とし、かけよってレフテリスを抱きしめ、強く接吻した。

——おれたち、みんな、じきに捕えられるだろう……と長兄が言った。おれたちがお前をけしかけたんだと世間は言うだろう。

アサーナスについて

アサーナス (G. Athanas —— 本名は Georgios Athanasiades-Novas) は 1893 年ナウバクトスに生まれた。法律を学び、短期間弁護士を業としたのち新聞界に入り、「アクロポリス」紙其他で文筆をふるった。その後政界に進出、国会議員、同議長、文部大臣、その他を歴任した。しかしアサーナスがその天分をより多く発揮したのは文芸方面である。彼は少年時代より文学に興味をもち、早くより文学活動を始め、詩に小説に劇に批評にと多方面の活躍をした。彼の表現の方法は平易簡明、その創作精神はつねにギリシア民族の生活と伝統、ギリシア国土の風物からインスピレーションを得ており、いかにも民族的作家と称してよい。ここに訳出された短篇にもそうした彼の作風の一端をうかがわせるものがある。短篇集 *Deka Erotes* は 1933 年にアカデミアの賞を受け、彼の作品で外国語に訳されたものも少くない。1956 年にはアテネ・アカデミアの会員に選ばれ、1965 年にはその院長となる。現代ギリシアの政界、文芸界の大御所とも言うべき存在である。(J.O.)

英語の散歩道

丸 山 幹 正

僕の育ったのは港町であった。歩いて一分もかからない所に、かなりの荷揚げ波止場があって、どこからともなく入港しては出て行くドンガメ船（例の材木製の不格好な船をこう呼んでいた）を朝早くから眺めては興がっていたのを思い出す。船の男達は、入港する際、ひしめきあって停泊する船と船との僅かな間隙にもぐり込むべく、いつもながら悪戦苦闘するわけだが、その時毎度のようによせられるのが、ゴーストジを掛ける！ ともを見る！ というものだ。ゴーストジというのはその状況からして、船のスクリューを今迄の前進から急激に後進に切り替えて一挙に船を止めてしまう事だとはわかっていたが、これはついこの間まで、その際にエンジンの発する擬声音とばかり思いこんでいた。ところが辞書に *Go astern!*（後進！）とあるのを見つけ、なるほどと思っ

た。一寸考えてみると、すぐ別の音にごま化された例が浮んで来た。中学の頃、ソフトをよくやったものだが、守りについた時のドシマイ！ (Don't mind!) は、実際何の意味か解からなかったが、ドウモナイ！の訛ったもの位のつもりであった。Attaboy! (=That's a boy! でかした！) などの間投詞を見つけるとアタボウやベラボウなどとの類似に注意したくなる。とまあ話がつまらぬ方向に向いだしたので軽い調子で辞書や、そこらの当世的な会話帳にもないようなおもしろおかしい言い回しの二、三を紹介すべく、僕と一緒に英語巷歩きとでも酒落こみませんか。

昨夜、宝塚に「ジョージガール」なる映画を見に行ったところ、内容の庶民性に見合うだけの通俗的な単語を耳にして一寸驚いた。ジョスなる男が、妻と喧嘩する場面で You bitch! (このあばずれ女が！) と言うと、彼女も負けずに You bastard! (あなたはやくざよ！)。この bastard などは、最高に下品な単語の一つだが、これにある分詞を加えると、どうしようもない悪語になるのでこの辺で。

英国人と風呂屋で話している時だった。Here's mud in your eye! (乾杯！ちなみにロシア語で Ha ЗДОРОВЬе! ナ・ズダロービエ、独語は Prosit! 仏語で Pour votre santé!) これが、どうしてそんな意味になったのか尋ねた事がある。オックスフォード出身の彼すらわからないという。そして洗髪中の僕の眼を覗き込んで Here's soap in your eyes! 二人ともゲタゲタ。乾杯というので もう一つ思い出すのが、Down the hatch! これは hatch (艀口) でわかるように船乗りが言い出したものらしい。色々おもしろい。

酒が出たのもう一つ。これは辞書に載っているので余りおもしろくないが、迎え酒などというのは非常にこった表現をしているものだ。例えば「二日酔で迎え酒をした。」は、I've got a thick head and took a hair of the dog that bit me. と言うが、二日酔の気分の悪さをうまく言い得ている。又、ドイツの学生の間では、二日酔のことを Katzenjammer と言う。猫の悲嘆とは、なかなかおもしろいではないか。ついでに もう一つ辞書にないものを。to bend the elbow (ひざを曲げる) は文字通りの意味だが、転じて「一杯やる」という意である。又、「虎になる」は、get dead drunk でいい。日頃まじめな僕のイメージをイタク崩すかもしれないが、愛読者の興味をいやが上にも引き付けておく為に、不本意ながら酒の後は女といきましょうか。

「ちょっかいをかける」この当世風の言い回しを英語にすればどうなるのでしょうか。さすがに、あなたも辞書や会話本にないだけに乗り気ですな！。これは、なかなかいいのがあって、He is always in there pitching. (奴はいつもあそこでピッチングしている。) これが、どんびしゃにうまい対応だとわかったのは、つい最近ですが。女の人には、時々、何でもないので

くクラクラ、或いはキィーキィー笑ったりしますが、さすが cool な英国人 It's a girl's mating call. など、さりげなく。mate などの単語は、各自辞書で調べておく事。

Il y a du monde au balcon! (彼女は肉づきがよい!)。仏人もなかなかうまいことを言うもので、如何にも、出る所が出張っている感じを言い得て妙である。

sister-boy これは日本英語かと思っていたが、残念ながらタイトルを忘れたアメリカ映画の中で使われていたのを一度だけ聞いている。併し、英国人は、こんな単語を知らない。

話が少し世俗的になり過ぎたので、一寸ラジオでも聞いて気分転換を。FENの映画案内は時々おもしろい事をいってます。The Officer's club at Iwakuni Base features a brand-new movie without any scratch, entitled "Spartakus", starring Kirk Douglas, Tony Curtis and Christine Kaufmann. 雨の降ってない映画というのをこういっていたのである。では、雨ふり映画はどうなのか? これは、高校時代だったか中学だったか確かでないが、何かの本で読んで覚えている。flickering pictureといった。flickerというのは「ちらつく」「明滅する」という動詞。

同じFENでこんなおもしろい言葉の遊びを耳にして、「なかなかやりおるわい」と感じた。I'm sorry to cut in but now is the time to cut out, bye-bye! これは女性のアナウンサーが mood music を途中で止めて、時間切れを告げてさよならした一文だが cut in 「わり込む」と cut out 「やめる」がみごとに使い分けられている。

It's 10 minutes away from 7 o'clock. これもFENの言い回しだが、普通に言えば It's 10 minutes to 7 o'clock. である。全く色々おもしろい。

FENを聞いていて、気づいた事を経験的に書いて見ようと思う。

"On the Beach" (落にて)というネヴィルシュートの原作になる映画を見た人も多からうと思われるが、原作に比べて trash (くず) [この単語は、頻度の高いもの] との批難が高かった。その中で、Where were you during all the... the... watchmacallit? (=What you may call it?) [あなた、あの... あの... なんとかいったわね、その間中どこに居らしたの?] という下りがあるのだが、こんな風に liaison されたのでは、聞き手は、迷惑なわけで、これが普通に行なわれる会話体である所に、我々外人に日頃の訓練が必須な論拠がある。FENにしる映画にしる、こういった早口の liaison が何気なく使われるから、我々には始末が悪い。この最も著るしいのが、comedian 達のそれで、僕も又彼等の comedy を捕えるべく悪戦した一人である。僕等は、これに100%を期待してはならない。又、出

来もしない。なんとなら、山本富士子の物真似をする comedian を笑えるには、彼女を知っていなければならない。社会的背景が必要なのである。だからその意味では、外国に行くに越したことはない。

秋は、多くの日本人に愛されるが、それは思うに、あの川端康成によく描かれるようなそこはかとない物憂さ、或いはさびしさとか幽玄静寂の世界を、秋特有の閑寂として降り敷く雨と筒抜けるようで吸い込まれて行きそうを、それが故に僕らの孤独感を刺激しないではおれないあの小春日和の蒼穹とが醸し出すからに違いない。それはそうと小春日和という単語もなかなか興がある。英国では、St. Martin's summer day, 米国では an Indian summer day, 仏国では *été de la Saint-Martin* (ou *Saint-Denis*) 或いは *petit été* という。雨についても色々ある。「雨が止んだか？」 *Has it stopped raining?* もいいだろうが *Has the rain let up?* の方が英語的。「じゃんじゃん降り」などは、よく知られている *to rain cats and dogs* であるが、*Rain falls in sheets.* (篠つく大雨) などもある。J. Steinbeck の *Wayward Bus* 「気まぐれバス」の中にも *The rain sheeted down.* 「滝のような雨だった。」とある。

雨の次は「風」といきましょう。「二人は結婚するのだと風のたよりに聞いた。」英語では、*My little finger (or A little bird) told me they'er going to get married.* と、ぐっとロマンチックにもってゆく。

さっきの *to rain cats and dogs* で思い出したが、両動物共、言葉の上では褒められて使われたためしかない。仏語でも *vivre comme chien et chat* と言えば「けんかばかりして暮す」の意である。「世界残酷物語」の名でよく知られているイタリア映画も、原名は「*Mondo Cane*」(犬の世界)であり *The world is going to the dogs.* (世も終りだ) など似たような表現がある。*a dog in the manger* (いじ悪な奴) *to let the cat out of the bag* (秘密をもらす) *to make a cat's paw of* (指先で使う) など嫌らわれたり、侮られたり、ひどい仕打ちを受けている。只 *avoir du chien* と言えば「(女が)はつらつとしている」ということになる。そしてこの意味の生命力の強さというのを買われて、フランスのシュールレアリストであり、反戦詩人であった Paul Eluard に愛された。この位の事がなければ、彼等は救われない。

I would rather have his room than his company.—Bismarck. これをK君が想像力豊かにも次のようにメー訳した。「私はそれを会社で持つよりも、部屋で持つのを好む。」この「それを」が、もし女性であるなら、このビスマルクの一文は、理論上ゆゆしき

ことになる。実は、（彼がいない方がよい。」と言っているのである。併し、メイ訳と云えば、philosophy を「哲学」と訳して有名な西周でさえ、自分の書齋に *Chambre de Science* と平気で書いて「研究室」を意味するつもりでいたらしい。こんな言葉は、仏語のどこを探してもない。又逆に Maugham の *Of Human Bondage* の中に “It don't make much difference to me what the weather is, having to be in here all day.” とあって、結構つり合いは取れている。而も、この場合は、英人が英語を使っているのにこうなのだから、僕等は救われる。僕等は、蹉跎を恐れてはならない。習ったことは、どしどし使うべきなのだ。

さて一緒にそぞろ歩いて来た僕等の散歩道には、早くも真冬のあの切れるような西風を思わせぶりして僕らの頬を通りすぎゆく秋風と共に、長い静かな夜の帳 (*the veil of night*) が太急ぎで垂れ掛けて来たようです。そろそろ尽きないたわごと (*balderdash*) はこの辺で止めて、諸君とお別れしなければなりませんまい。秋の夜は、詮ないざれごとを、いつ迄も語らんには貴重すぎるでしょうに。Au revoir! Ne vous enrhumiez pas!

教育実習の思い出

屋敷睦実

附属中学校・高校にて、

10月7日から22日までの教育実習を終えて、大学に帰った時には、文学部前のプラタナスの木がもう黄葉していました。長かった二週間、附属中学校、高校あわせて6時間の英語の授業を担当してみて、教えることの難しさ、教えてもらうことの尊さをしみじみとかみしめています。高3 Grammar 1回、高2 Reader 1回、高1 Reader 2回、中3 1回、中1 1回の授業でしたが、それぞれに違った味わいがありました。実習中は不注意から風邪をひいてしまって、とうとう最後までしわがれ声の授業でした。でもやればやれるものですね、不十分な教案をかかえて列車の中で書いた Teaching Procedure、高2 Reader の、質問攻めにあって、たじたじだった50分、中1の命令文の導入に完全に失敗してしまった授業、悔恨だらけの6時間ではありましたが、楽しい毎日でした。

でも、自分のことばかりに気をとられてしまって（うまく教えられるかしら、時間通り予定の所まで進められるかしら……）生徒中心に教壇に立つことが出来なかったことを深く反省しています。